

劉完素と『西山記』

奥野 繁生

さいたま市

金代の医家・劉完素（1126～32生，1200以後没）には，その著作として『素問玄機原病式』（1154頃），『内経運氣要旨論（素問要旨論）』（1172以前），『習医要用直格（傷寒直格）』（1182以前），『黄帝素問宣明論方』（1186以前），『素問病機氣宜保命集』（1186）などがあり，これらの著作中には多くの引用書名がみられるが，その中のひとつに『西山記』がある。

『西山記』は佚書だが，秋月觀暎『中国近世道教の研究』（創文社）や坂内榮夫『鐘呂伝道集』と内丹思想（『中国思想研究』第七号）などによれば，『西山群仙会真記』や『三洞群仙録』（ともに『道藏』所収）などに引かれており，完素の医書に引かれる『西山記』の文章は『西山群仙会真記』所引のものとよく符合する。以下にその対照を示す。

- ① 素問玄機原病式』六氣為病・火類「西山記曰，餌之金石，當有速亡之患」
『西山群仙会真記』卷之三・補内「西山記曰……又鍊無情之金石，取天地之秀炁，而為外丹餌之填精補海，幸而藥盛，而時暫無損。若以元陽耗散，而丹臺空虛，餌之在腹，當有不救之疾，取之於人，當有速亡之患」
- ② 『習医要用直格』卷上・内外八邪「西山記曰，久勞則安間，以保其極力之處，久逸則導引，以宣其積滯之氣」
『西山群仙会真記』卷之二・養形「西山記曰……久勞則安閑，以保極力之處，久逸則導引，以行稍滯之炁」
- ③ 『習医要用直格』卷中・主療「又仙經西山記言，平人四時嘗有晷，謂三焦相火無不足，八節不得吹，謂腎藏陰難得實」
『西山群仙会真記』卷之三・補損「西山記曰……四時常有晷，三焦無不足，八節不得吹，腎府難得盛」
- ④ 『習医要用直格』卷下・傷寒傳染論「西山記曰，近穢氣而觸真氣」
『西山群仙会真記』卷之二・養炁「西山記曰……不近穢處，防穢炁，觸真炁」

完素の医書中に「西山記曰／言」として引かれているものは以上だが，ほかにも「仙經曰」として引かれるもの，また何の引用書名も示さずに『西山群仙会真記』所引『西山記』の文章と対応するものも少なくない。とくに『内経運氣要旨論』には，通明形氣篇第七のはじめに一箇所，守正防危篇第九の後半に十数箇所にあぶ引用部分があるが，引用書名を記さない。しかし一箇所，「華陽真人曰」と記しているところがある。『西山群仙会真記』には「華陽真人施肩吾希聖撰，……李棟全美編」とあり，完素の引用が『西山群仙会真記』からのものであることをうかがわせる。

この『西山記』を含む『西山群仙会真記』は，『靈宝畢法』や『鐘呂伝道集』などととも鐘呂派内丹法と称されることがあり，その内丹理論のひとつとして「心腎交合之理」（『靈宝畢法』序）が挙げられる。『金史』本伝に「以降心火益腎水為主」と記される劉完素の医学に『西山記』の影響は小さくないが，完素はそのすべてを受け入れたわけではない。『習医要用直格』巻中には「仙經云，純陽升而為仙，純陽死而為鬼」を「俗又妄言」として引用した後，「此則修養家言形神之陰陽，而非医家寒熱之陰陽也」といい，「修養家」と「医家」の陰陽の違いについて述べている。

鍊丹理論としての心腎相交は，北宋の『聖濟総録』（1111～18）あたりから医書中にも散見されるが，『素問』の運氣論をベースとする劉完素によって医学理論として用いられ，心腎不交という病態認識が形成されるのである。